新しい朝

田中澄江

立風書房

新しい朝

1972年8月10日　第1刷発行
¥ 530

新しい朝

著　　者　田中澄江
発行者　下野博
印　　刷　信毎書籍印刷株式会社
　　株式会社 美術版画社

発行所　立風書房
東京都品川区東五反田3—6—18
電話 東京447—1191（代）
振替 東京 74493　〒141

落丁・乱丁本はお取替えいたします。　0093-03631-8909

目次

新しい朝　3
僕のひとりごと　65
父の愛人　199

装帧·生沢 朗

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新しい朝

一

複雑な家族関係である。

ひとに説明を求められた時、一言で言いつくせないような——

一夫はわたしにとっては生さぬ仲の息子だが、弟の次郎とも母親がちがう。

一夫の母親は、戦後間もなく病死し、次郎の母親が、そのあとで、この山田家に嫁いで来た。

夫の山田義夫は、戦前は羽振りのよかった軍需会社の工場長をしていたが、激変した戦後の波を乗り切れず、何をやっても当らなかった。

勝気で、派手好みだった次郎の母は、昔気質の姑とことごとに対立し、すぐに他人を信じこん

ではだまされるお人よしのせいもあって、なかなか仕事の芽がでない夫にあいそをつかし、次郎を残して、離婚した。まだ赤ん坊だった次郎の妹だけを連れていった。

わたしは言わば、山田家にとって三人目の妻なのだ。

しかも前の夫を交通事故で失い、忘れ形見の一人娘、伸子を連れ子としてやって来た。

この家に、これ以上の子供はいらないと思えたが、光夫が生まれた。

父親のちがう伸子と光夫。母親のちがう一夫と次郎。その四人と、義夫の義母のとりを加えて、七人の家族が住むのは、玄関の三畳に茶の間の四畳半、奥が六畳という、三間の家である。一人当り約二畳の畳数はあるのだが、机や箪笥(たんす)や本箱という、家財道具が入ると、決して広いとはいえない。

学校から帰っても、家の前の路地で遊んでいる光夫、造花の内職にいそがしいわたしに代って、これも学校から帰ると、台所仕事を引き受けてくれる伸子、この二人は、机らしい机も持たず、勉強は茶の間の食卓の上でやることになっているから、そうそう家の中の場所をとるとは言えない。一番この家の中では年若の二人が、一番他の家族たちに気がねしているらしいことは、母のわたしにはぴんぴん、胸にひびいてよくわかる。しかしわたしはだまっている。何も気づかないような顔をし、それが当り前なような顔をしている。この二人だけが、この家の家族の中

で、自分の腹を痛めた子供である。自分の肉親である。わたしは、そのことで、特に彼らの味方をするといったような態度をとることは、絶対にすまいと、誓っているのだ。

この家の狭さをもっとも嘆いているのは、次郎ではなかったろうか。

都立南高校二年生で、さ来年の春は、大学受験をするはずである。私立に進むには費用がかかる。東大か教育大か一橋か、一流中の一流の国立が彼の志望であるようだ。四当五落などと言う言葉があって、四時間だけ眠る位に勉強しなければならぬ。五時間も眠りこんでは落ちると言われるほど、受験生活はきびしいらしい。勿論、実さいには、そんなに無理をして合格するはずもないと思われるのだが、彼は週に何日かは、たしかに四時間位きり眠らないようだ。夜の二時まで起きていて、朝は六時にもう床をはなれている。

彼の机は六畳の外の廊下の隅にある。

わずかな庭の空地を前にしたその場所は、あるいは、家の中で一番静かで、広やかだと言えるかもしれない。しかし、部屋の中で、人声がする間は、彼の心は勉強一本に没入(ぼつにゅう)できないのではないだろうか。彼は昨夜もおそくまで寝なかった。十二時、一時まで、廊下は明るかった。

いや、昨夜おそくまで寝なかったのは、彼だけではない。夫も、姑も——

一夫が帰って来なかったのである。

一夫は今年二十一歳になる。中学を卒業するとすぐに近くの薬品工場につとめた。無理をしてでも高校へやりたいのが、わたしたち夫婦の気持ちだったが、二年頃から彼はそれを拒否した。

「どうして？　やっぱり高校までいかなくちゃ、就職にもいい条件のがないだろう」

「いいよ」

「いいよってお前……学校が嫌いなのか」

「ああ嫌いだ」

「成績だってそんなに悪くないじゃないか」

「いいったらいいんだ」

中学三年の三学期のある日、奥の間で夫の声をふりきった一夫は、吐き出すようにつけ加えたものだ。

「おれのことなんて考えてくれなくてもいいんだよ。お父さんだって弟だの妹だのごちゃごちゃいて大変だろ」

鋭い刃のような言葉は、そのとき、夫の胸をまっ二つに切り裂いたにちがいない。

夫はそれ以後、一夫の高校進学について一言も語らなくなった。ごちゃごちゃいる弟や妹——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それは一夫にとって、自分だけが邪魔ものと思わせるものであったのだろうか。
生き別れだが次郎には母親があり、伸子にも光夫にもわたしというものがある。
それからしばらくして、わたしは夫のいないところで一夫に言った。
「お母さんはだれもかれもこの家の子供たちはみんな自分の子供だと思っているのよ。一夫さんを高校にあげる為なら、いまやっている内職だけでなく、もっと他のもさがして、せっせとかせぐつもりよ。家の事は心配しないで、高校に入ってちょうだい。次郎さんだって伸子だってきっと高校へいくでしょう。その時、一夫さんだけ中学というのだったらあとで困ることがあると思うのよ」
一夫は返事をしなかった。光夫の読み捨てた漫画本の頁をめくっていた。
「ねえ一夫さん、お母さんはこの家の長男としてのあなたはやっぱり高校にいった方がいいと思うのよ」
「長男?」
と、一夫ははじきかえすように暗い眼をぶつけて来た。
「おれは長男だなんて考えたことないよ」
「だって一番上の兄さんでしょう」

「生まれた順序なんかどうでもいいさ。おれのしたいことをやって迷惑かけなきゃいいんだろ。ほっといて下さい」

とりつく島がなかった。わたしがようやく三歳の伸子をつれてこの家の妻として入って来た時一夫は十歳。次郎は六つ。二人してよく伸子のお守りをしてくれたものだったが、男の子の気持ちの中には、いつか家族から自分を切り離して、自分だけの空に羽ばたきたい思いが強まってでもゆくものか。

いや、一番の大もとのところは、わたしが彼を生んだ母ではないということだ。

そして、彼の母の死んだあと、すぐに次郎の母をもらい、更にそのあとすぐにわたしをもらった父、一夫にはそんな父に、少年らしい反発を感じているのであろう。

十年の間に三人も妻をかえて——というのが、一夫の祖母、一夫の死んだ母の母、とりが日頃から不満げに何度となく義夫に当り散らす言葉である。

戦前は貸家など何軒か持って裕福に暮らしていたとりにとって、一夫の母は、家つきの一人娘であった。そして義夫はとりの亡夫が見込んで養子に迎えた実直な青年であったのだ。

「本当に死んだおじいさんも娘も、とんだ見込みちがいをしたものだよ。一夫一人を守って一生独身ででもいてくれるどころか、十年の間に三度も女房をかえたんだもの」

一夫の母が死んだのは、戦後の食糧難の時に、肋膜を患ってのことである。

次郎の母は、義夫が、軍需工場の倉庫に焼け残った資材を使って紙製品の製造に手をつけた時、女工として入って来た一人であった。母のない一夫を、自分のアパートにつれて帰って抱き寝などしてくれるやさしさに、義夫の情がうつったのだが、迎えられて山田家の二度目の妻となって五年目、工場が火災を起して大きな損害を受け、方々への借金で再起があやぶまれた時、年下の工員の一人と共に家出してしまった。

一夫の祖母であるとりにとって、次郎の母の振舞いは、娘婿の義夫を侮辱することであった。坊主憎けりゃ袈裟までもの譬え通り、彼女は、いまだに次郎にはこだわりを持ち、彼が、小学校時代から、ほとんど首席に近い、優秀な成績で進んで来たのを無視しているようだ。

一夫が、敢て学校にゆかず、中学だけで働きたいというのは、多分に、次郎の好成績が、やがて一流の国立大学に進むことを見越してのことではないだろうか。

一般に於て高校出と大学出身者とが、就職の面で、どちらが有利であるかはいうまでもない。

中学出身となると、いよいよ大学出との距離が大きくなる。一夫ははじめから、次郎との競争相手になることを避けて、中学出であったら、だれしも大学出とは競べようもないというところをねらったのではないだろうか。

少なくとも家の中で、一夫はいつも孤立して食事どきでも、めったに一緒に食べることがなかった。

夜は奥の間に、祖母と並んで寝るのだったが、夕飯のあとまたとび出してゆくので、早寝早起きのとりはもっと早く帰るようにと、よくぐちっぽく訴えている。

その一夫は、昨夜はとうとう明け方になっても帰らなかった。

はじめにとりが、次に義夫が、次に次郎が寝いったけれど、わたしは夜通しかけて起きていた。

——どこへいったんだろう。

どこで何をしているのか。

交通事故か。それとも喧嘩にでもまきこまれて——何も手につかない思いで、お花見用の桜の枝に下げるピンクの花をつくりつづけていた。

一夫はたしかに自分の肉体をわかち与えた子供ではないが、ひとの生んだ子供を、わが子として眺めつづけてこの十年をすごして来たせいか、わたしには、もしも万一のことがあったらと思うさえ全身が冷えわたるようなおそろしさだった。

「昨夜おそく新宿で、喧嘩したんですよ。相手はどぶに落ちて骨折したので、傷害罪になるかも

しれないから、一晩留置所に泊まってもらったんです」

近くの交番から連絡があったのは、夫は会社へ、次郎たちは学校へ出かけたあとだった。姑のとりは、心配だからと、一夫のつとめ先へでかける仕度をしていた。

わたしは警官の姿を見るなり、家の門先まで出ていってそこで様子を聞いたので、とりには直接聞かれないですんだ。近ごろの警官は物言いもやさしい。帰ったあとで、会社から知らせがあって、一夫は昨夜は友人のところへ泊まったのだととりに告げた。

「馬鹿な子だね。うちがあるのに何故友達んところになど泊まるんだろう」

「麻雀か何かの仲間にいれさせられたんじゃありませんか」

「麻雀なんて。あたしみたいにパチンコでもやってりゃいいんだ」

とりはパチンコが好きだ。またお得意でもある。わずかな球からたばこだのかんづめなどをはじき出して金に換え、自分のお小づかいにしている。それはまた一夫のお小づかいにもなるらしいのだが。

とにかく、生きて、無事に、一夫の帰ってくるのはうれしかった。

角のたばこ屋の赤電話で、夫に知らせた。やっぱり、友人のところだったと言った。

「その友人ってのは女じゃないだろうな」

「まさか」

「一夫ももう二十一だからな。ま、帰ったらこれからはだまって外泊なんかしないように言ってくれ」

夫の声には、一夫を案じながらも、すっかりわたしに任せきった安堵感がある。

わたしは今年三十五歳だ。二十一歳の息子を持つにはあまりに若すぎる。

一夫がまだ十四、五の時は、まだしも自分なりに、母の眼を、母の心を持とうと、背のびしながらも一生けんめい思ったものだった。

学校のP・T・Aにも欠かさずに出かけた。育ちざかりの男の子は、汗のかきようもひどく、汚れも激しい。子供たち四人の洗濯ものは夏などは毎日たらい一ぱいに出るものだ。けれど、その中でもわたしは、一夫のものをこまめに洗った。頭ものびはじめると、自分でバリカンを持ち出して刈ってやった。おとなしい伸子は万事控え目だし、次郎は、自分のことは自分でするという手のかからない子供だったし、小さい光夫は別として、わたしは、自分の時間を、一番多く一夫に割ってやったようである。心のすみに、一夫だけは、母がいない、一夫の母は死んでいるというふびんさがしっかりと根をはっていたのだと思う。

十年連れそった、そして、現実には、わたしとちがって、血をわけた夫や姑のとりに、一夫が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com